



Title	方言地理学の展開
Author(s)	徳川, 宗賢
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39312
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	とく 徳 がわ 川 むね 宗 まさ 賢
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 5 0 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 7 月 7 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	方言地理学の展開
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真田 信治 (副査) 教 授 宮島 達夫 教 授 イルジー・ネウストプニー

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、方言地理学についての申請者の考え方を包括的に示したものである。

方言地理学は、言語地理学ともいう。20世紀の初頭、『フランス言語地図』の作成に伴って、ヨーロッパで誕生した学問である。一言でいえば、それは、言語を、分布図を利用して、それをとりまく地理的環境とのかかわりにおいて、記述、分析、考察しようとするものである。

申請者は、この学問の対象をヨーロッパから日本に移して、実証的な立場から、その深化と発展をはかろうとする。

第1部は、総論である。

まず、日本における方言地理学の流れを概観して、この学問の全体像を浮び上がらせる。そして、明治期の文部省国語調査委員会の音韻と口語法に関する調査、柳田国男の昭和初期の論文「蝸牛考」、戦前戦後にかけての柳田国男と東条操との論争などに言及する（第1章）。ついで言語外的要因（使用者の属性、地図作成の手順など）と言語内的要因（地域的な意味のずれなど）との両面からみた方言分布の実態を通じて、方言地理学の本質を掘り下げる（第2章）。このアイデアが、第3部において具体的に展開されるのである。そして、金田一春彦の論文「比較方言学と方言地理学」に関連させて、隣接分野である比較方言学と方言地理学との異同や相関についての見解を述べる（第3章）。論争のかたちをとっているが、これは正反合のレベルに達することをめざしたものである。さらに、調査地域（調査の範囲）、調査地点（調査の場所）、調査項目（質問の内容）、調査対象（回答者）、そして調査法（質問法）の5つの観点を通して、方言地理学の可能性に及ぶ（第4章）。この章は、いわば形をかえた方言地理学概説といえる。また、方言調査というものの本質を、さまざまな観察法、仮説と実証、内省の可能性などの角度から、具体例を引きながら考究する（第5章）。

第2部は、方言地理学の具体的な実践である。申請者は、国立国語研究所のプロジェクトの一つであった「『日本言語地図』作成のための調査研究」に、その1955年の出発時から完結時まで、中心となってかかわってきた。また、科学研究費の補助のもとに1957年以降実施された共同研究「『糸魚川言語地図』の作成」のプログラムに深く関係して

きた。

まず、糸魚川地方における「カマキリ」と「ヒキガエル」の名称の分布をめぐっての解釈が取上げられる（第1・2章）。これらは、戦後日本の方言地理学の魁の一つである。ついで、『日本言語地図』でのデータから、「アザ」と「ホクロ」の表現をめぐって、分布模様の分析と、文献を通じて知ることのできる言語変遷との相関についての考察が示される（第3章）。そして、方言地理学の射程が数千年に及ぶ可能性を明らかにする。さらに、糸魚川についての「タンポポ」と「カタグルマ」、糸魚川と『日本言語地図』の両方にまたがる「シアサッテ」と「ヤノアサッテ」をめぐっての分析が示される（第4章）。最後に、『日本言語地図』に対して、各界から寄せられた批評についての申請者の見解を述べて、締めくくっている（第5・6章）。

第3部では、方言地理学にさまざまな角度から新しい光を当てて、その展開の可能性を探ろうとする。申請者による方言地理学の深化と発展を考察した部分と/or することができよう。

まず、等語線をめぐる論議がある。等語線とは言語特徴の分布領域の外周線をいう。そしてその掘り下げによって、分布地図上にあらわれる方言分布の背後にまで視野が及び得ることを提示する。まず等語線がスタティックなもののようにみて、実はダイナミックであることを説く（第1章）。ついで使用語の等語線のほかに、理解語の等語線のあることを示し、しかも理解語の等語線に進展の等語線と退縮の等語線の別があることを明らかにする（第2章）。これらの区別を認めることができ、すなわち方言分布の背後にあるものに視野が及ぶ、ということに通ずるのである。方言分布の背後にあるものについては、別に調査そのものに関連する場合のあることもある。二回の繰り返し調査の結果を比較すると、種々のパターンが現れて、そのことが客観的に明らかになる（第3章）。

結局、平面的な方言分布地図にも、当然のことながら、その背後に、ある種のことばの立体像が隠されている、ということである。このことは、空間軸から考察する地理的分布の変化も、実は別の軸にそったことばの変異相の流動と連動するものである、と言い換えてもよいであろう。そのことを直接に明らかにするために、まず手始めに地域差と時代差・年齢差との関連を考察している。地点を限定した統計的な長岡調査と、連続した地域に関する緻密な早川谷調査の報告がそれである（第4・5章）。特に後者からはグロットグラム（年齢×地点図）という術語が誕生することになる。

次に、方言地理学に当てる新しい光として、方言分布地図をコンピューターによって作成する試みを示す（第6章）。また、方言形が伝播する際の速度に関する考察がある（第7章）。年速約1kmという数字は、もちろん概略的な値ではあるが、データから帰納された新しい提案であり、方言分布というものの意外な年代的な幅を示唆するものである。

さらに、優勢な表現と劣勢な表現が地理的に接觸した場合に生ずる結果の種々相についての考察を示す。導入・混交・棲み分け・交替のそれぞれのケースについて、『日本言語地図』から実例を引きつつ説明する（第8章）。この章の最後では、特に言語接觸の盛んな都市部において新語発生の例が多いのは理の当然である、という見解が示される。

ところで、多くの方言分布地図を見ていると、そこに現れる諸表現には、いろいろな分布上の特色が認められる。まず、ごくわずかの地点にしか見られないものがある。その表現の特徴を分析する（第9章）。一地点にしか現れない方言特徴を「孤例」と称して、この章では、孤例の定義、孤例の出現傾向（方言特徴全体の中での量的構造、出現位置など）、孤例と調査法や作図法との関係、孤例の性格、孤例研究の意義を論じている。ついで、逆にきわめて広い分布領域を持つものに焦点を当て、その性格を分析する（第10章）。『日本言語地図』を見ていると、全国的に各種の表現がさまざまな分布傾向を示しながら現れる多彩な地図がある一方、全国がある一種の表現によって覆われている単純な場合のあることがわかる。この章では、後者のうちの文献をたどることによって知ることのできる日本語の史的変遷の単純な言語特徴との関係が、「日本語基盤語彙」として論じられている。そして最後に、申請者が年来扱ってきた方言語彙の研究についての総括がなされる（第11章）。ここでは、柳田国男が提案した「方言量」という概念（地理的に多彩なものは方言量が多いといい、単純なものは方言量が少ないという）についての再吟味がおこなわれている。また、江戸時代の方言辞書である『物類称呼』（1775）における見出し語と『日本言語地図』（～1975）でのデータとの比較がなされている。

第4部では、方言地理学の周辺をめぐっての考察がなされる。比較方言学、方言区画論、社会方言学との境界領域

の探究部分といつてもよいであろう。

まず、アクセントに関するものである（第1章）。アクセントの地理的分布そのものがアクセントの史的研究に役立つという指摘である。2拍名詞の類別語彙の統合を軸に据えた研究であり、昭和初年の服部四郎や金田一春彦以来の比較方言学と方言地理学との接点を具体的に考察した論である。また、日本最西端の与那国島アクセントが、最近もてはやされる、いわゆるN型アクセントであるという見通しを述べた古い論文を添える（第2章）。多型アクセント、一型アクセント、二型アクセントのほかに三型アクセントがあるという点の最初の指摘である。

次は、方言区画に関するものである。方言区画論は方言地理学とは無縁、むしろ対立する概念であるとする考えが、東条操以来、伝統的に唱えられてきた。ここでは、まず方言区画にあたってとりあげるべき観点が論じられる（第3章）。そして、従来あまりとりあげられなかった標準語からみた日本の地域区分が検討される。ついで『日本言語地図』を利用した具体的な分析である（第4章）。そこでは25本の境界線が提案されている。この二つの章は、いわば方言区画論と方言地理学との接点を考究した論ということができる。

最後に、従来の言語研究や方言研究ではとりあげられることが少なかった、しかし興味深い言語運用上の事実を呈示して、そこに地域差の見られるところから、方言地理学に応用する可能性、さらには国際比較に展開していく可能性について論じている（第5章）。興味深い言語運用上の事実とは、例えば話題提出の条件、挨拶のしかた、合議収束のプロセスなどである。結局この章は、いわば対照社会言語学と方言地理学との接点をさぐる論といふことができる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者が過去に別々に発表した諸論考を構成することによって成立したものである。長い歳月をかけた綿密な調査によって裏付けられた総合的な研究であり、そのスケールの大きさには他の追随を許さないものがある。

方言地理学の誕生によって、ヨーロッパの方言研究は大きく進展したが、日本でも、その輸入・紹介、さらにその消化と実践によって、従来の方言研究は一新されたのである。その先導者の一人が申請者の徳川宗賢であった。

ところで、日本における最初の方言地理学的研究としては、柳田国男の研究をあげなければならない。柳田の『蝸牛考』（1927初稿）は、特に「方言周囲論」の名によって知られている。柳田は、郵送調査によって全国の＜カタツムリ＞の異称を集め、その地理的分布の様相を参考にしながら、各異称の成立事情や分布状態の形成過程を推理したのである。しかし、この方面ではあとに続く研究者がなぜかすぐには生まれなかった。

言語地理学の本格的な研究は、戦後しばらく時をおいてから始まる。いくつもの成果があるが、ここでは、国立国語研究所の『日本言語地図』に特に注目したい。大規模な全国調査にもとづく業績だからである。1948年の暮、新生日本は「国語及び国民の言語生活に関する科学的研究」を行なうため、国立国語研究所を設立した。そして、そこでの研究の一つとして、「現代日本標準語の基盤とその成立過程」を明らかにし、さらに「日本語の地理的差異の成立と各種方言語形の歴史」を解明するために、本格的な方言分布調査に乗り出すことになった。調査は1957年から1965年まであしかけ9年間続けられ、『日本言語地図』全六巻（1966-75）として結実することになるのである。調査の及んだのは北海道北端から沖縄西端までの2400箇所、柳田の場合とは違って、資料は、すべて研究者たちが現地に赴いて、土地のインフォーマントから直接話を聞き取ることによって集められた。この研究の企画、調査手順、そして地図の編集作業に情熱を以て一貫して主導的役割を果したのが申請者の徳川宗賢である。

本論文は、「論文内容の要旨」に記したように、この『日本言語地図』のデータの分析、考察が、その中核となっている。本論文におけるそれぞれのジャンルでの成果は、いずれも、日本の方言研究をより高い水準に引き上げた貴重なものである。なお、第3部第6章に収められた方言分布地図をコンピューターによって作成する試みは、日本はもとより、世界でもっとも早い時期での前衛的な研究として各界から注目されているものである。

比較方言学と方言地理学との融合を意図した論説のなかでのアクセントの系譜に関する考察は申請者の独壇場である。第4部第1章に収められた論の補記には、次のようにある。「2拍名詞のアクセント5類の統合は、順列組合せ

の原理によって、結局52種しかありえないではないか。そして類が統合の方向に進むとすれば（類が分裂によって誕生することができないとすれば）、その経路は理論的に限定されるはずである。従来のアクセント史研究はそのことを明示的に捉えてこなかったのではないか。（略）52種のうち現存するものを白地図上にプロットすると、不思議にも整然と分布し、統合にむかう変化を地理的背景の中で奇麗に位置づけうることを知ったときには、非常に嬉しかったことを思い出す。比較方言学的には、方言の変化は周辺の状況とは無関係に独自に起こりうる、地理的な関係を考えるのはむしろ邪道と考えるむきが多いであろうに、すくなくとも日本の方言アクセントに関しては、地理的な状況を考慮することによって、歴史的変化もいっそう理解しやすくなるらしいことを知って、すうっと霧が晴れていくような気がしたことを思い出す。」

この論の考え方は、服部四郎によって「徳川理論」と名付けられた。また、この論を契機にして、妹尾修子によって、香川県伊吹島で、いわゆる第1次アクセントが発見されることになった。

以上のように、本論文にまとめられた研究は、その発表が比較的古い時期のものを含むとはいえ、日本の方言研究を根本的に革新した画期的なものである。また、今後に予想される研究、特に対照社会言語学的研究に導きの指針を与えるものである。博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。